北海道武蔵女子短期大学

25年のあゆみ

学校法人　北海道武蔵女子学園

同窓会

本学の第一回卒業式は昭和四四年（一九六九）三月二二日に、そして祝賀会も札幌グランドホテルを会場に盛大におこなわれた。

この日、同窓会発会式が挙行され、初代同窓会長に竹並紀美子さんが選出され、ここに北海道武蔵女子短期大学同窓会が誕生したわけである。

同窓会会員は最初のころは教養学科だけであったのが、昭和四九年に英文学科が増設されたので、同窓会会員も必然的に増加していった。同窓生は社会の各方面において活躍し、社会的信望も年ごとに高まっている。

現在では七〇〇〇名以上の同窓会会員が、全国にその輪を広げ、諸外国にも会員が散在しているという。

同窓会も積極的に活動を続けているが、そのなかから、主なものを挙げてみる。

「同窓会基金」 これは本学の創立二十周年（一九八六）を記念して、同窓会基金を設立した。主な事業としてクラブ活動への援助と図書・雑誌の寄贈等である。

クラブに対する援助金額は次の通りで、この基金を利用したことのないクラブも、積極的に活動して、どしどし申請を出してほしいと、事務局では言っている（詳細は表の通り）。

「同窓会文庫」 本学の創立二十周年を記念して、先に述べた同窓会基金と同時

同窓会基金内訳一覧

平成元年度

クラブ名	援助金額
バレーボール部	40,000円
青い鳥	40,000円
バドミントン部	40,000円
ESS	40,000円
競技舞踏部	30,000円
レムリア部	20,000円
放送部	20,000円
茶道部	15,000円
合計	245,000円

平成2年度

クラブ名	援助金額
バレーボール部	30,000円
バドミントン部	30,000円
スカッシュラケット部	30,000円
競技舞踏部	30,000円
放送部	30,000円
レムリア部	20,000円
美術部	20,000円
華道部	20,000円
茶道部	20,000円
合計	230,000円

昭和61年度

クラブ・同好会名	援助金額
ESS	40,000円
青い鳥	40,000円
軟式庭球部	40,000円
羽球部	40,000円
競技舞踏部	40,000円
華道部	20,000円
茶道部	20,000円
卓球部	20,000円
合唱団	10,000円
写真同好会	10,000円
合計	280,000円

他にクラブ連合体にコピー機（186,000円）を贈りました。

昭和62年度

クラブ名	援助金額
バレーボール部	40,000円
硬式庭球部	30,000円
スカッシュラケット部	30,000円
青い鳥	20,000円
ESS	20,000円
競技舞踏部	20,000円
バドミントン部	20,000円
写真部	20,000円
合計	200,000円

昭和63年度

クラブ名	援助金額
バドミントン部	30,000円
バレーボール部	30,000円
競技舞踏部	30,000円
青い鳥	30,000円
ESS	30,000円
スカッシュラケット部	20,000円
茶道部	15,000円
民族舞踊部	15,000円
合計	200,000円

にスタートし、同窓会からの図書・雑誌の寄贈が開始されたのである。この文庫は少し視点を変えて、普段学生たちにとって、親しみやすく、そして読みやすいと思われるものを選んでいるという。この

同窓会文庫

年度	図書	雑誌	金額	備考
昭61年度	585(冊)	13(種)	888,901	含書架1
昭62年度	169	14	353,970	
昭63年度	118	14	310,820	
平1年度	123	13	315,837	
平2年度	157	13		12. 31現在

同窓会事始

私たち第一期卒業生が、真新しい校舎をくぐってから早いもので一五年が経ちました。

同窓生一同、心からのお慶びを申し上げます。

すべてが新しいことばかりの学生生活に、とまどいながらも教職員の方々と創り上げていくことの喜びはたくさんありました。全員がおぼえられる程の学生数です。サークル活動、大学祭などすべて一致団結のもとでの活動でした。「どこの学校ですか?」と尋ねられ、「武蔵女子短大です」と答えても「はあ!」との返事にはとまどったものです。

初めての同窓会を開いたとき、学生数も着実に増え、学校もかなり知られる様になったことは私たちの喜びでした。

私たち同窓生は、豊かな知識を学びそれぞれの社会へ巣立っていきました。生活の基盤は異なっていても武蔵で学んだ誇りと勇気は心の中で生きています。

これからも、ますます豊かな学園へと発展させていくことは、私たち同窓生の使命と考え、出来る限りのお手伝をしていきたいと思います。

(初代同窓会長　竹並紀美子「十五年のあゆみ」より)

記念パーティー

文庫は学生たちに人気があり、とても好評であるという。

これまで、何冊ぐらい文庫に入ったのか、表に示す通りである。

「同窓会名簿」発行　同窓会名簿は卒業後に、同期に卒業した会員名簿が配布されるが、五年に一度全会員の同窓会名簿が発行される。

昭和六三年度は、同窓会創立二十周年に当ったので、全会員掲載の同窓会名簿を発行した。教養学科第一～二〇期生(四六七八名)、英文学科第一～一三期生（一六八五名）である。

「同窓会創立二十周年記念総会並びに記念パーティー」

昭和六三年八月二七日、午後六時より京王プラザホテル札幌「雅の間」において、記念総会が開催された。

出席者二百余名、総会後記念パーティーが華やかに、そして楽しいひとときを参会者全員で過したのである。

また何か記念に残せるものはないかと、〝カレッジリング〟のアイデアが出て、それが作られたことも特記すべきことである。

以上同窓会の主な事業について述べたが、同窓会会員の思い出など、二、三人の会員にお願いしたものを次に掲げることにしたい。

また前述のように、同窓生は各分野で活躍しているが、マスコミ等に名前の出る同窓生も散見する。最近記憶にあるのは、はまなす国体のイメージソングを作詩した村上智恵子（英文学科第四期）、朝日新聞道支社の「らいらっく文学賞」入選の蒲生ゆかり（教養学科第一二期）などである。いずれにせよ、会員の益々の発展と活躍を期待したい。

カレッジリングについて

我が武蔵女子短期大学の同窓会も二十周年を迎え、そして、たくさんのお仲間をも迎えることができ、たいへんうれしく思います。

この節目に何か記念に残せるものはないだろうかと、会として何度か話し合ってきました。そして若い方から〝カレッジリング〟はどうでしょうかと提案があったのです。とても素晴らしいと思う反面、同窓生に喜ばれるだろうかという不安もあったのです。でも幹事会での度重なる討議の中で、注文が少しでもいいのではないかということでスタートしたのです。

みんなしろうとです。デザインは…、サイズは…、発送は…、といろいろ問題点がでてきます。専門家との打合わせの中で、今の素適なカレッジリングが誕生したのです。

皆さんから六〇〇個以上のご希望をいただき、同窓生に喜ばれたことを会としてもうれしく思います。

同窓生同志、お顔もわからないほどおります。どこかで同じカレッジリングをしている方とお会いしたとき、あら！と思うこともあるのではないでしょうか。

武蔵女子短期大学の同窓生としての誇りをいつまでも消すことのない様、いろいろな立場でがんばっていきましょう。

（教養学科一期生　竹並紀美子「同窓会会員名簿―二十周年記念―」より）

武蔵寮のおもいで

山田良江（旧姓林）
（教養学科・第二期生）

この一一月、私は職場で勤続二十年の表彰を受けました。昭和四五年に武蔵を卒業して現在の職場に司書として勤務してから、はや、それだけの年月が過ぎ去り、若かった私も今や中年と呼ばれるに相応しい年齢になりました。

振り返ってみますと、創立二年目の武蔵女子短大のキャンパスは、周囲を北大農場、向かいは皮革工場、校舎は灰色の二つの建物、それに僅かなライラックの若木と、随分、殺風景でした。又、体育館も図書館もなく不自由な事もありましたが、学生がいきいきとしており、自分達が、この学校の歴史を作っていくんだという気概が感じられました。

学生には個性的な人が多く、年齢にも幅があり、社会にでて働いた経験を持つ人が結構おり、私のように病気のために遅れた者も伸び伸びと学生生活を送れ、中でも忘れられない事に寮があります。入学をした時、大学の寮は未だ建築中で私達寮生は、一ヶ所は大通りにあった北海タイムスのビルに、もう一ヶ所は北大第二農場近くのアパートにと、二ヶ所に別かれて住みました。アパートは新築で、一DKに四人ずつが住み、食事は松原さん御夫婦が一緒に住み込んでいましたので、用意していただきました。一方北海タイムスのビルに住んだ人達は、部屋や食事に悩ませられたようでした。六月下旬（だったと思いますが）に、学校とは新川をはさんだ琴似八軒

松原夫妻ともお別れ

に新しい二階建の寮が完成し、引越しました。六畳間に二人、そして食堂兼集会室、洗濯場、洗面所、お風呂、新しい建物は快適でした。部屋割り、掃除当番など、すぐに決めなければならない事があり、早速、集会を開いたり、団体生活の難しさもありましたが、一年間一緒に暮らした友達というのは、他の友人とは違った親しみがあります。誘い合って学校に行き、教室では前の方に陣取り、しっかりと（？）授業を聞いていました。真面目だったんですね。日頃はテレビのグループサウンズに夢中の寮生も試験の前は、さすがに机に向かっており寮もひっそりと静まりかえっていました。でも「〇〇さん、試験の前日なのにレース編みをやっているよ。余裕なのかしら、あきらめたのかしらね」なんて、噂がながれたりするのも寮ならではの事です。又、若いということは食べ盛りなのでしょう。夜、食堂でお喋りをしているうちにお腹がすいた何人かが、残りの御飯でお握りを作って食べてしまい、翌朝起きた松原さんに、「残り御飯を見込んでお米を研いでおいたんだよ」と、困った顔で言われ、返す言葉もありません。

松原さんといえば、おいしかったカレーを思い出します。ルーを仕込んだ日は、寮中カレーのよい香りがして、「今夜はカレーかしら？」と、寮生の期待が集まっていました。寮の門限は九時だったでしょうか、十時だったでしょうか定かではありませんが、寮の辺りは夜になると人通りも少なく、バス停は新川に架かる橋の側にしかなく、痴漢がでるという噂もあり、八時以降に帰る人は携帯用防犯ベルを持って外出するか、誰か（複数）にバス停まで迎えに来てもらう、ということにしました。現在のあの辺りの状況からは想像もつかないかもしれませんね。まだ地下鉄も無い時代のことです。

卒業後は寮を訪れる事も無く過ぎてしまいましたが、もう寮はなく、松原さんの奥様（私達は『おぱさん』と、親しく呼んでいました）もお亡くなりになられたとの事、御冥福をお祈り致します。

私達の青春時代、友と語り明かした武蔵寮にもさよならをいいましょう。建物は無くなっても、そこで得た友情は今もつづいています。

思い出の人

中川詳子
（英文学科・第七期生）

今でこそ二十五年の歴史を持ち、多方面で活躍する多くの卒業生を輩出している我が母校武蔵短大ですが、私が受験校を選んでいた五四年頃には、決っして広く知られた学校ではなかったと思います。私自身、高校の担任の先生に受験を勧められて、はじめて札幌に武蔵女子短大があることを知った位でした。

卒業してからもうすでに九年の歳月が過ぎ、振り返ってみればあっという間の二年間で思い出らしい思い出もつくることが出来ずに終ってしまった気がします。そんな短い学生生活の中で一番の思い出は千葉淑子さんという一人の女性と知りあえたことではなかったかと思います。

入学式も終って、講義ガイダンスの日の帰りではなかったかと思います。私の苗字が「なかが わ」、そして「ちば」さんですから、ロッカーが近くということで、私に声をかけられたのが千葉さんでした。新入生にしては落ちついた雰囲気ですし、一八歳の私にとってはずいぶんお姉さんっぽかったので「おや?」と思いました。その後、やはり偶然同じクラスになって、いろいろ話をしたりするようになり、千葉さんが二人のお子さんをお持ちの主婦であることを知りました。

千葉さんは高校を卒業後、銀行に二年間おつとめされて、二〇歳で、教師をなさっている御主人と結婚され、

思い出の人（右から２人目）

その後一三年間妻として母として生活してきていました。

そんな日々の中、お子さんも小学校に入られて、ふと「大好きな英語を勉強したい。」と思いたったそうです。ただ、世間一般の主婦の多くは、カルチャースクールや文化教室といったところで楽に片手間に…で充分だと思うところなのですが、千葉さんは大学へ行って、専門的に奥深い勉強がしたいと思い、受験に挑戦することにしました。御主人の指導とはげましのもと、一年間の受験勉強をやり遂げ、晴れて武蔵の学生となりました。私のように、すぐに働きたくもないし、何をやりたいのか今ひとつわからないし、という中途半端な気持ちで大学へ行く者とは当然勉強に対する姿勢が違います。

今思い起こしても、本当にあの二年間千葉さんは一生懸命、積極的に勉強してらっしゃいました。短大の授業は休講も少ないし、月曜から土曜までびっしりつまっていますから、母であり、妻である生活をしながらの予習復習は他人にはわからないつらさがあったと思います。実際、試験の時などは家事を終えてから明け方の三時まで勉強なさったこともあるそうです。そうして、つらい思いをしながらも勉強にはげんでいる母親の姿は子供達にとっては百の言葉よりも良い教育になったことでしょう。

私にとっても、千葉さんの自分にとってプラスになりそうなことにはどんどん自ら動いて取り入れようとする姿は、とても考えさせられました。今もそういうイメージがあるのかどうかわかりませんが、どちらかといえば、武蔵の学生はおとなしい人が多いようでしたので、授業中の質問や発言もあまりなく、水を打ったように静かな講義ということもよくありましたが、千葉さんはいつも疑問点をみつけてどんどん質問したりしていたのを覚えています。

卒業後も、月に一度クラスメートの数人で集まり、北区民センターを利用して英語勉強会のようなものをしていたのですが、これもアイデアを出し、場所を探して、いろいろ動いてくれたのは千葉さんでした。それぞれ、結婚や仕事のつごうなどで二年ほどで終ってしまい、私自身千葉さんともなかなか会えなくなってしまいましたが、その後も、消費者モニターに応募したり、水泳で身体をきたえたり、最近では放送大学の講座で勉強したり…とあいかわらず前向きな日々を送っているそうです。そして、何より好きな英語を近所の子供達に教え始めたということですから、本当に何かを始めるのに「もう遅い」なんて思ってはいけないということを千葉さんは私に教えてくれました。

そんな千葉さんが短大生活で得た一番のものは「素晴らしい先生や素晴らしい友達にめぐり会えたこと」と

言ってくださるのですから、友達の一人として本当に光栄に思えます。

社会人となり、学校という恵まれた囲いの中から抜けると、なかなか自由に身動きができなくなりましたが、自分で動こうとしなければ、流されるばかりですから、動きだすのに遅すぎるということはないということを、私に教えてくれた千葉さんという一人の女性と知りあえたことが、私にとって、武蔵での一番の思い出なのです。

思い出深い母校

高畠鈴代
（教養学科・第二一期生）

卒業して約一年半、私にとって武蔵女子短期大学は思い出深い学校です。私はここで忘れられない多くの人たちと出会い、楽しい思い出をたくさんつくることができました。親切にご指導頂いた先生、学校の方々、友人たち。

私は教養科の図書館司書コースで、三〇人という少い人数で和気藹々とすごしていました。今思えば、学生生活を振り返っても一番楽しい時期でした。私はこの時期に少しでも人間的に成長できたのは、周囲に啓発され、個性を発揮できたからだと思います。武蔵の二年間はあまりにも早く過ぎてしまいましたが、現在の私に至るまで大きな影響を与えたと思います。

私は同窓会幹事会で武蔵の先輩方ともお会いする機会が度々あります。学校を卒業され、それぞれの道に進み人生の指針をしっかりともって行動している姿はいつも敬服させられております。

学校祭の折、久しぶりに学校を訪れ、校舎が改築されて、学生たちの賑う姿を見て時がたったことを改めて実感しました。

短大の二年間、もっと積極的に行動すればよかったと反省する点も多いですが、勉学に励み友人たちとの交流を深めることで有意義にすごすことができました。

これからも武蔵女子短期大学は後輩たちが社会へ巣立っていく基盤となる学校であり、私たち卒業生のなつかしい母校であってほしいと思います。

忘れられないゼミのことなど

飯田貴恵
（教養学科・第二二期生）

私は武蔵女子短期大学を平成二年の三月に卒業し、現在は内浦湾沿いの伊達市に住んでいる。卒業してから、まだ一年も経ってはいないのだが、友人の大半が札幌方面ということもあり、短大時代のことがなつかしく、そして特に短大時代にできた友人達と、ゼミの教授のことを思い出すのだ。

私と、その友達は全部で一〇人いて、みんないつもニコニコしている人達だった。誰れかが失敗したり、落ち込んだりしてると、「どうしたの？元気だしなよ。」と声をかけてくれて、それでもその人が元気にならない時はしばらく様子をみていてくれる人、何か険悪なムードになった時には不思議に気の効いたことを言って周りをなごませてくれる人、当然みんながみんな、いつも元気というわけではなく、悩みごともあったけれど相談したりされたりと、あたたかい友人達であった。

彼女達との思い出で楽しかったのは何といっても茶道部のお茶室を占領して、ゲームに興じたことである。幸運にも、私の友人は茶道部が多く、講義のあいた時間に彼女達の後をついてお茶室に入れてもらい、持参のお弁当を食べ、煎茶を飲んで、その後はできたての真新しいタタミの上で、総人数二〇名弱が百人一首とカードゲームをして賑やかに過ごして、最後にはお茶室で記念写真も撮らせていただいたのだった。しかし友人達との思い出も楽しいことばかりではない。就職を控えた二年目の夏にはやはり皆、顔が強ばって口を開くと就職の話になった。

まだ就職の内定がない友人達と愚痴を言いあっていた時にその中の一人が「自分に合った会社が見つかるまでじっと待とうと思う。落ちた時は縁がなかったと思うことにする。」と笑顔で言っていた事が忘れられない。せっぱつまった状態で、本人も悩んでいたに違いないのにみんなが深刻になった時に自然に笑顔が出せるその友人に対して私はつくづく感心してしまった。

友人達の何人かと入ったゼミの教授も、物静かで温和な方だった。

教授は静かな分だけ周りのいろんなことを見ておられ

たのだと私が思ったのは、ある日、教授の所にゼミの総人数五名で伺った時のことだった。教授が突然「あの杉の木の枝にカラスが巣をつくってるんだ、見てごらん。」と双眼鏡を渡して下さったのだった。その木は私達がいつも使っていた教室の窓からも見える木だったけれど誰れひとりそれに気づいていなくて、その時はじめてカラス一家の存在を知ったのである。

みんなで驚いて、その後順番に子ガラスを双眼鏡で見たのが、ゼミでの忘れられない思い出である。

卒業を目前に控えた最後のゼミで教授が御自身の若き日の事を少しだけ語られたが、その話の中から、教授は本当は厳しい方だったと知り、そして厳しい強さがあるからこそ温和でおられるのだなと思った。

私は現在窓口の仕事をしているが、怒ってやってくるお客様や、何度も同じことを聞くお客様などいろいろな人がやってくる。そうすると私の顔は凍りついた笑顔になってしまうし、失敗して意気消沈する事もあるが、そういう時に、友人達の笑顔や気配りを思い出し、また教授のことを思い出すのである。そして「笑顔、和顔愛語。」と自分に言いきかせて仕事をしているので、短大での出会いは今の私のプラス方向への力になっているように感じる。

短大の頃のことをふり返ると、講義から学ぶことも少なくはなかったけれど、友達や教授、講師の方々との出会いの中から学ぶことの方が多かったように思うし、考えるとあたりまえのことだけど「武蔵女子短期大学に入学したからこそこんな、楽しい出会いがあったんだな。」と感動してしまうのである。

これからも武蔵女子短期大学に何人もの人々が入学し卒業するだろうけれど、学生達の出会いの場である母校がいつも素晴らしい学校であってほしいと思う。